実践文章講座⑩

辰濃 和男 ●ジャーナリスト、日本エッセイスト・クラブ理事長

教育現場はさまざまな「発見の驚き」に満ちています。その驚きをすなおに書くことの大切さや、その訴える力の強さについて、実際の通信の文章を基に、辰濃先生に紹介していただきました。

「『発見』の驚きを書く」

ある新聞記者が、養殖場の海底に堆積するヘドロを取材するため、海に潜ったことがある。

ヘドロがどの程度、海を汚染しているかという記事を書くためだった。30メートルの深さまで潜った。「ヘドロに手を突っ込むとヌルッと肩まで入った」と記者は書いている。ごく短い記事だが、「ヌルッと」という表現に、ヘドロの不気味さへの恐れがこめられていて、いまも記憶に残っている。

肩まですっぽり入ってしまうヘドロ、というのは発見だ。その驚きをすなおに書く。それが新聞記事の原型だと私は思っている。

学級通信、学校だよりの数々の紙面を拝見して、主に現場での「発見の驚き」が少なからずあることに気づいた。

長野市立豊栄小の『好棒！』に、田んぼの草取りの記録が書かれていた。その中で、ある子が「水口の回りの稲は実っていない」ことを発見した。なぜだろう。子ども達は、試みに水口の水温と排水部分の水温を測ってみた。7度もの差があり、それが生育に影響を与えているようだった。念のため、他の田でも調べた。やはり5度から7度の差があった。ごく小さなことだが、貴重な発見だ。

「水温が7度も違うんで子どもたちは大変驚いていました」という先生の感想があった。現場での発見に驚き、その驚きをすなおに書くのは新聞の基本だ。いい記事だった。

東京・江東区立東陽小の『きんぼし』に載っていた「長所さがし」の記事にも、発見の驚きがあった。クラスの子を二、三人ずつの班にわけ、同じ班の子が相手の長所をいう。いわれた通り、自分の長所を紙に書く。その結果、さまざまな発見があった。

「自分のいいところがこんなにあったんだなと思った」「これからも友人の長所を見つけられる人になりたい」。自分の長所がこんなにもあるという発見は、多くの子には驚きだったろう。現場での発見、驚きのある文章は訴える力が強い。

岐阜聖徳学園大学附属小の『はじめのいっぽ』に「秋の自然見ーつけた」という豆記事があった。生活科の勉強で八幡様にゆく。「子ども達がいちばん驚いたのは、『ぎんなん』の臭いです」と先生は書いている。こういう小さな驚きが、実はあとあとまで生きつづけることがあるのだ。

私の知人の元教師（今は定年退職）は子ども達と野原で転げまわるのが好きな先生だった。秋になると、学校のそばの金木犀の巨樹のそばにクラスの子を連れてゆき、香りを満喫させた。

クラスの一人は、高校生になっても大学生になっても社会人になっても、毎年、金木犀の季節になると必ず手紙を寄こす。「先生、また金木犀が咲きました」という便りだ。

子どものころの発見の驚きや歓びは、かくも深く濃く、消えることなくつづく。

●たつの・かずお
朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。

※本文中で紹介された作品は、第4回「育て！プリントコミュニケーション」コンクール入賞作品集に所収されています。同作品集はご希望の先生にさしあげています。お申し込みは財団HP（http://www.riso-ef.or.jp/）から。